

渥美清さんも寅さんが流行るまでは無告の民を演じていた。

明るく一本気な庶民であるが、どこかに過去を引きずっている影のある人である。わたしの舞台の無告の民と似ていた。渥美清さんはそれを意識してくれたのかもしれない。

人生にもしはないという。しかし、もし、わたしが渥美清さんに脚本を書かせていただけるとするならば、どんな人を書いただろう。渥美清さんに松浦弁

は似合わないし、しゃべれないだろう。東京の下町になるのか。下町ならば浅草か柴又の帝釈天か。やはり、わたしが書く必要はなさそうである。浅草の裏道を歩いてみるといい。表の浅草とは全く違う浅草がある。

われわれの公演では、旅公演

楽しかった旅公演

はもつとも重要な公演である。われわれの舞台を見たこともない地方の人に見てもらおう。老舗の劇団の公演なら長崎や佐世保でも上演する。われわれ小劇場では団体の観劇は難しい。昔は伝を頼っての地方公演であった。

わたしの若い時代には寝泊まりもお寺の本堂や公民館でした。もちろん、自炊である。女性は港まで出掛けて、イワシやアジの干物を安く仕入れていた。漁師の人も女の人にはおまけをしてくれた。劇場も公民館や野外であった。若さとはいい

個室の子供部屋などはなかった。雑魚寝が普通であった。いまは個室で育った人が劇団員にも多くなった。風呂も1人で入る。朝食も宿屋の飯である。昔の銭湯にはうるさい爺さんや、入れ墨の人がいて裸で人生を学ぶ場所でもあった。入れ墨

いまは人に構っては損をするらしい。「人に説教をする町内のやかましい爺さんがいなくなった」と居酒屋で嘆いている人がいる。いたずらっ子に説教をした爺さんが親に怒鳴り込まれたらしい。その子は親にしゃべることができなかった。「わが子だけがよければいい」。この風潮はあるのかもしれない。わたしの母親もよく怒鳴り込む人だった。転校生。転校した子供も一人ぼっちになるが、隠岐の島へ引っ越した母もそうであったらしい。バランス感覚がなかった。それを教養がないというのかもしれない。「孝行をしたい時には親はなし」とはうまくいったものである。